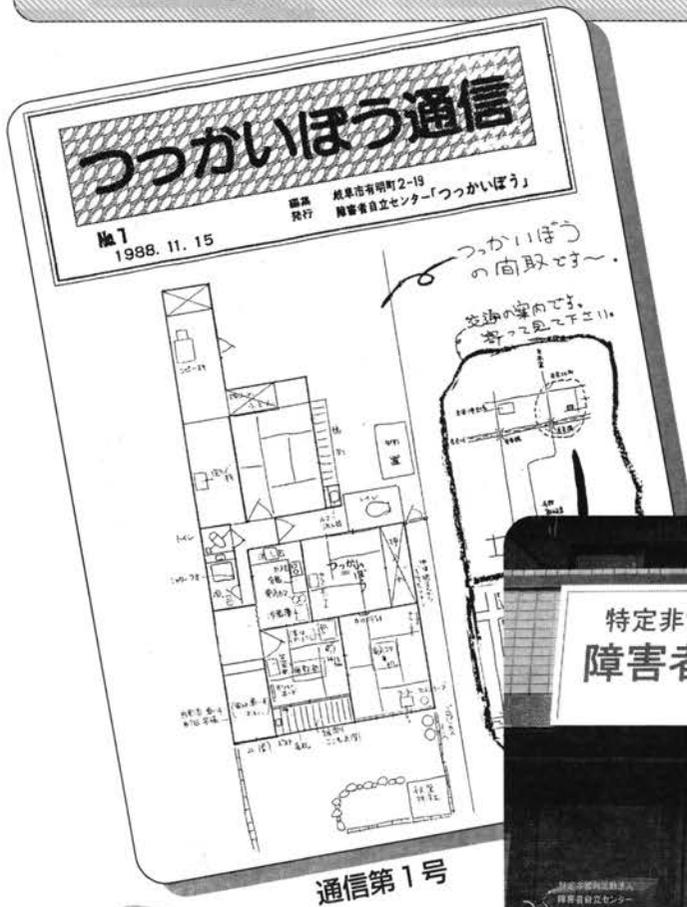


つっかいぼう設立25周年記念誌

地域で暮らすことを求めて



法人事務所・介護派遣事業所



就労継続支援B型事業所「ビー・カンパニー」

特定非営利活動法人 障害者自立センター つっかいぼう

つっかいぼうの足跡

- 1984 (昭和59) 東海障害者映画祭 東海5県5ヶ月間連続上映
JR岐阜西駅駅舎改善運動
- 1985 (昭和60) 第1回みんなでやろまい障害者・健常者の大交流キャンプ (長瀬駅前キャンプ場)
- 1986 (昭和61) Tさん、国立長良病院より自立、支援
- 1987 (昭和62) (仮称) 共同の家設立準備会始める
国際障害者年中間年企画「モア・コンサート」
第4回東海障害者交流集会岐阜集会 (85年より開催)
- 1988 (昭和63) 障害者自立センターつっかいぼうの家開設
「いい旅しよう! 京都」交通アクセス運動
- 1989 (平成1) 第1回大カルタ取り大会 (大垣城ホール)
- 1990 (平成2) つっかいぼう3周年記念シンポジウム
「モムのカレンダー」販売を始める
- 1991 (平成3) つっかいぼうにて「わっぱん (自然食品)」の月1回の販売を始める (以後、販売品目を増やして行く)
- 1992 (平成4) つっかいぼう代表岐阜市議選に出馬
「国連・障害者の10年」最終年イベント開催
つながり亭開店
- 1993 (平成5) つながり亭、岐阜市障害者小規模通所施設として開始
つっかいぼうで自立体験を繰り返していたHさん、家を借りての一人暮らし開始
- 1994 (平成6) 全障連 (全国障害者解放運動連絡会議) 岐阜大会開催
(仮称) 「就学を考える会」始める
- 1995 (平成7) 「就学を考える会」「徳田茂講演会」
「就学を考える会」から「共に育ち合う教育を考える会・ぼちぼち」結成
- 1996 (平成8) つっかいぼうにて、2番目の作業所を目指してロウソク作りを始める
- 1997 (平成9) 「ロウソク工房ヴァリエーション」岐阜市障害者小規模通所施設として開始
- 1998 (平成10) つっかいぼうの家を返す (閉所)
- 1999 (平成11) 車椅子移送サービスを始める
つながり亭、徹明町から竜田町に移転 (定員拡大)
- 2001 (平成13) 岐阜市にて自薦登録ヘルパー制度開始 (98年より交渉開始)
Iさん国立長良病院より自立 (3~4年前より支援開始)
介護派遣部スタート
- 2002 (平成14) 8月、つっかいぼう、特定非営利活動法人取得申請
11月、特定非営利活動法人認証
12月、つっかいぼう「15周年記念イベント」開催
- 2003 (平成15) 支援費制度による指定居宅介護事業所「つっかいぼう」(4月)、同「サポート」(6月)開始、「日常生活支援従事者養成研修」実施、以後適宜に開催
- 2004 (平成16) つっかいぼう事務局と自立支援部が、元浜町から早田東町に移転
- 2006 (平成18) 10月、福祉有償運送開始
同月、支援法完全施行に伴い事業所を再編成し、居宅介護等事業所「サポート」を廃止、「相談支援事業」開始
- 2010 (平成22) 4月、2つの作業所を統合、「つながり亭・ヴァリエーション」とし、地域活動支援センターへ移行。
- 2012 (平成24) 4月、居宅介護事業所を登録特定行為事業者として登録する。特定相談支援事業所「サポート」、一般相談支援事業所「リバース」を開始。
- 2012 (平成24) 4月、岐阜市黒野に就労継続B型事業所「ビー・カンパニー」を建設し、事業を開始する。(地域活動支援センター「つながり亭・ヴァリエーション」廃止)
7月、ビー・カンパニーの中で、自然食レストラン「オルタ食堂」営業開始。
- 2013 (平成25) 7月、「第7回 障害を持つ人の卒後を考える交流集会」開催

理事長あいさつ



つっかいぼうは 設立25周年を迎えました

理事長 吉田 朱美

25年前、障害者を街で見かける事も稀で、ましてや重度障害者の一人暮らし等全国でも数える程で岐阜では到底無理と思われていました。出来たばかりのつっかいぼうに通うにはタクシーに車いすを積んで来るか、お客さんの手を借りて車いすごと釣り上げてもらって路線バスに無理やり乗って来るかでしたが、乗車拒否も度々と言う状況でした。

けれど、夕食の準備で近所のスーパーに行くと言品物が通路にも置かれ車いすで進めない事もありましたが、毎週行くようになっていつの間にか通れるようになっていたり、つっかいぼうの話をするとおまけしてもらえて、嬉しくても辛くてもそれを集まったみんなでしゃべり、地域で生きていることが実感出来て、この場所が出来て良かったと心の底から思い合えました。

法律も度々変わり、つっかいぼうの活動形態も仲間の生活の変化や時代と共に少しずつ変わりました。重い障害を持つ人も地域で自立できるように、働く場の運営やヘルパー派遣事業を行っています。しかし、誰もが共に生きる事の出来る社会にはまだ遠く、様々な課題が山積しています。今後も諦めることなく活動して行きたいと思います。

つっかいぼうの立ち上げから今日まで、実に多くの方々のご協力とご支援を頂き深く感謝致しております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。このような関わりがなければ、何事も実現させることは出来なかったと思いますし、関わりの方や機会を作り続けていく事も大切な活動の一つであると思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

つっかいぼうの活動紹介

つっかいぼうの目的である「障害者の地域での自立と誰もが共に生きる事の出きる社会」を実現させるための活動を行っています。

- ◆**地域交流活動**…交流キャンプ、大カルタ取り大会等、障害のある人、ない人に広く呼び掛けてみんなの力で作り上げます。
- ◆**広報・啓発**…つっかいぼう通信の発行（不定期）、ホームページの開設等
- ◆**学習会、その他**…国の政策についての学習会、移動困難者の移動の確保についての取り組み、障害のある人たちの卒後を考える交流集会IN岐阜、全国一斉就学ホットライン（年2回）、医療的ケアについての学習会、体験型自立生活プログラムetc.地域で生きるのに必要と思われる事に積極的に取り組んでいきます。

就労継続支援B型事業

- ◆「ビー・カンパニー」の運営…定員30名。

【仕事】自然食レストラン「オルタ食堂」経営、自然食品・無農薬野菜等の販売、食品加工品の製造販売、下請け作業、キャンドルの製造販売・キャンドル講習などを行います。

【その他】地域交流ふれあいまつりの開催、小旅行など

介護派遣事業

- ◆**指定居宅介護事業**……身体介護、家事援助、重度訪問介護

地域生活支援事業……移動支援

法によらないヘルパーの派遣(生活保護他人介護加算、自費等)

- ◆**登録特定行為事業者登録事業所**（喀痰吸引等実施）

- ◆**重度訪問介護従業者養成研修 基礎・上級課程**

24時間、365日の派遣、原則同性介護、当事者主体の支援を行います。

相談支援事業

- ◆**一般相談支援事業** リバース……地域移行・地域定着、施設・家族からの自立を支援します。

- ◆**特定相談支援事業** サポート……計画相談行ないます。

福祉有償運送

実施区域……岐阜市、本巣市、各務原市



古い民家を借りたつっかいぼう



つっかいぼうの中
(写真は今は亡き高橋さん・土屋さん)

つっがいぼうの活動の紹介



自立支援法全国一斉行動に呼応して
名鉄岐阜駅前での街頭行動



カルタ大会風景



自立支援法全国一斉行動パレード（東京）

自分らしく生きることを求める取り組み

理事長 吉田 朱美

つっかいぼうは施設や活動で知り合った障害者が中心になって始めた「家でも施設でもない自立のための共同の家」である。

つっかいぼうを借りたばかりの頃の学習会では「自立とは何か」がテーマとなった。重度の障害を持つ者にとっては何をやるにも「介護」は切り離せず、「人の手を介しての自立」と「人の手は借りず(借りてもそれは最少)自分でやるのが自立である」という二つの自立観があった。

一人では調理ができないなら、たとえば納豆や冷奴を食べるとか自分で出来るものを食べるのだと主張していた。つまり、自分の力で出来る事は時間をかけてでも自分でやり、どうしても必要な事だけ最小限手伝ってもらおう。自分一人で出来る範囲の中で出来る限りの自立をする、例えば家の中だけでとか、午前中使っただ歯を磨くとか、自分を律して生きるという事なのだと思う。反論する人は、いくら簡単な食事の準備も自分ではできない。自分には納豆を練ることも豆腐を買いに行くこともできない。トイレも着替えも何もできない。その考え方では何もせずにじっとしているしかない。ましてや一人暮らし等絶対に出来ない。自分で何もできない人間は自立できないのか。二人の重度の脳性麻痺者の意見が対立していた。

その他の障害者たちも、それぞれが自分の障害のある現実と生活への夢を心に話し合いに加わり、何回も続いた。障害を持つ私たちにとって、「障害」があっても自己否定しない自分に変わる大切な時間であった。同席する健常者は聞き入り、障害者達の障害や自立に対する想いと願いを共有していく時間だった。

「人の手を介して自分の思う生活をする」という考えが優勢であり、それがつっかいぼうの自立であり活動の道しるべとなる。

つっかいぼうは目的の「重度障害者の自立と共に生きる社会の実現」にむけて様々な活動を行ってきたが、中でも大きなものとして毎週末の合宿があった。集まって活動を考えたり出かけたりする以上に、家族や施設から離れて、つっかいぼうに集まる学生や社会人等のボランティアの手を借りて一泊二日過ごすこと、それは「つっかいぼうに行くために自分で交通手段を考え、人を頼み、食事を考え、買い物に行き調理の指示をする、一日の生活の流れを自分たちで考える。いつも何も頼まなくても家族や職員にやってもらっている食事やトイレの介助を考え考え人に伝える…」は、人間関係を作る、自身体験をする、社会経験を積み重ねるうえで大変重要な事だった。

つっかいぼうで初めて家族から離れ一人暮らしを始めた（「自立生活」を始めた）のは（故）花村美智子さんだった。

彼女はつっかいぼうが出来る前の山鳩の会からの仲間で、つっかいぼうを開設する事に一番熱心だった。自分の自立と重ね合わせていたのだと思う、その取り組みは開設直後から開始された。活動に関わるボランティアに声をかけ、週末合宿以外に滞在する日を少しずつ増やしていった。しかし歩みは決して順調ではなく「障害者は家の中でおとなしくするもの、また家族以外の人の手を借りるなど人に迷惑をかけてはいけない」といったどの障害者もいつも言われる、つまりは多くの人が持つ障害者観と同じ考えの家族の反対があった。何度かの短期の自身体験の後、苦労して協力者を募りやっと1ヶ月の体験の計画を立てると、家族の大反対にあい一時は家から出してもらえなくなる事態があった。

しかし、家族の生活に合わせて生きるのではなく自分の生活がしたい、自分の介護に縛られている家族を自由にしてやりたいという思いは強く、実力行使を含め家族への説得を行いながら、カレンダーやパンの販売の仕事を理由につっかいぼうに通い、宿泊の日数を伸ばしていった。その間少しずつ着替えや身の回りの物を運び、つっかいぼうのメンバーを交えての家族の話し合いの後、1992年作業所の開始を前に住まいをつっかいぼうに移した。

住民票がまだ岐阜市外の実家にあったため、ヘルパーは使えず、つっかいぼうに関わるメンバーを中心に、その友人知人等約30～40名の人ボランティアとして生活を支えた。一日2～3回、2～3時間ずつ、トイレ、着替え、洗面、調理、食事、洗濯、掃除、書類の整理等、生活するうえで必要最低限の介助を受けての一人暮らしであった。

30～40名の協力者を募る事、一人一人の都合を聞き介助ローテーションを作り生活を継続させる事は想像を絶する努力がいった。翌月の介助の予定を埋めるため不自由な手で全身の力を使って毎晩毎晩2～3時間、電話を掛ける姿が目には焼き付いている。

介助者が決まらなければその日はトイレも行けず食事もできない事を意味する。死活問題である。急なキ

キャンセルが入るときもある。試験や長期休みの期間は介助者が見つかりにくい。毎日が綱渡りのような生活であるが、だからこそ都合を合わせて毎月来てくれることがうれしいと話していた。彼女と介護者には強い絆が生まれていた。

しかし慢性的な介護者不足は続き、電話かけの心身の疲労と生活の不安は大きく、そのことから少しでも楽になれるように岐阜市に住民票を移し、ヘルパーと訪問入浴のサービスを受けるようにした。当時、ヘルパーは9時から17時の時間内のみの派遣で、1回の時間数も僅かだったが朝の生活と入浴の安定は大きかった。訪問入浴は男性のスタッフも加わっていたので、同性介助を要望し実現した。

1992年12月にはつながり亭が出来て日中の介助が安定し、1993年にはつっかいぼうから自分で借りた家に引っ越し本格的な生活が始まった。ボランティアの介護者達にいくらかでも介護料を支払い安定的にかかわってもらえるようにと、他人介護加算大臣承認を目指して生活保護申請をするが、第1回目は市の担当と当方の制度の理解の不十分さで、申請はあえなく受け付けられず、生活保護の勉強の末、後日改めて申請し無事受けられる。

市の担当の「介護がなくて生活できないなら施設に入れればいい」といった暴言もあったが、生活保護と他人介護加算一般基準が支給され、大臣承認に向けての準備が開始され、2000年末終わり大臣承認を得る。岐阜県では初めてであった。介護料が若干支払えるようになり、生活は幾分安定した。

1996年には、国立長良病院（現長良医療センター）の筋ジス病棟で入院生活を送る（故）今井隆裕さんから退院・自立の支援の依頼が入った。つっかいぼうにはこれまでも幾人かの長良医療センターをはじめとする筋ジスの人との関わりがあった。その一人に高等部を卒業後、毎週センターからやってくる元気の良い若者がいた。何時かは自立したいという思いを持っていたが、進行が速く20代半ばで亡くなった。

つっかいぼうに自立を支援する力が無いのが情けなかった。つっかいぼうが出来る前にも、自立への思いを抱きながら亡くなったり、在宅でも重度の障害を持ち自立を願いつつ亡くなった仲間達が多かった。

今井さんは気管切開し人口呼吸器をつけていたため、吸引等の医療的ケアと一日24時間の介助が必要であった。重度の筋ジスの人の自立の例は全国的にも非常に少なかった。勿論岐阜にも彼を支える事の出来る公的な医療と介護の体制は少なく、周囲からは不可能と言われた。

しかし亡くなった多くの仲間達の事を思うと、いつまでも負けてばかりはいられない、そんな現実を終わらせてここで自立を実現させなければという思いが消えなかった。もう一つ、入院している仲間たちは自立という言葉を中心に封印して自分達には全く関係ない事、夢でしかない事と思おうとしているようにみえた。それが決してそうではない事をいつか見せたいとずっと思っていた。とはいえ、自立に漕ぎ着けるまでの道すじが描けているわけではなく、とにかく一緒に切り開いていくことにした。

生活のすべての時間に介護者をつける事、ミリ単位と言われる細かな介護と医療的ケアを行う事は、ボランティアを集めるだけでクリアできる事ではなかった。またボランティア自体も集まらなかった。とにかく、24時間の公的な介護保障と、在宅での日常的な医療体制と緊急時の医療体制作りが必須だった。

全国的にも呼吸器をつけた24時間介助の人の自立の例は少なく、すべてが手探りであった。ホスピスの活動をする団体や、介護や看護に関する団体に協力を呼びかけた。JIL（全国自立生活センター協議会）の協力を受けて、各地の呼吸器をつけて自立生活をしている人の生活や支援体制を見に行ったり、自立センターづくりの研修を受けた。

しかし、医療と介護の状況はあまり変わらなかった。というより退院の目的が立たなければ、退院後の生活の支援体制は出来ず、支援体制ができなければ退院は出来ない。そんな中で2001年つっかいぼうに自立支援専従者を置き、その頃に病院側からも自立支援を担当する職員がついて、定期的にベッドサイドで会議を行うようになった。

医療には幾つかの大きな課題があった。一つは医療を必要とする人が病院以外の場所で暮らすには、専門的な医療と日常的な健康管理のための医療と、入院等の緊急の医療の連携体制が必要な事。

二つ目に、何かが起きた場合の責任や最終的な判断は誰がするかの問題。それは常に「家族」にあり、彼の主張する「自立生活をする自分」とはならず、自立生活がスタートしてからも「家族」から「つっかいぼう」に移る事はあっても「本人」になる事はなかった。

次に、吸引等の医療的ケアは医療職以外では家族にしかできない事。しかし自立生活では家族ではなくヘルパーや介護者が行うことになり、違法行為となる。ヘルパーや介護者は医療的ケアをどうやって学び、彼らの違法行為をどう守っていくのか等々実態に追いつかない医療制度や医療モデルの問題があった。

今井さんは家族に退院自立の説得を続けながら、病院に対しても退院に対する合意とその後の医療に対する協力体制を求め、気長に説得を続けていた。

介護体制については、自分の介護や医療的ケアが出来る介護者をヘルパー登録させて自分だけに派遣させることが出来る自薦登録ヘルパー制度を市に要望し、2001年4月に制度化された。

入院中の外出は病院の研修を受けた医療職の同行が条件であり容易ではなかった。

病院以外の場所での生活の可能性、介護や医療的ケアを覚える事、生活の流れを作る事、介護の指示をする事、誰にとっても未知な事で失敗の許されない事が山積していた。考えた結果、退院7ヶ月前に住まいを借りて研修を受けた医療資格者の協力を得て、学生を中心に集まり始めた介護者たちと自立体験に合わせ介護と医療的ケアの研修を機会がある毎に繰り返し行なった。そういった取り組みの中で人が集まり始め、介護体制が少しずつ出来ていった。そして寒くなる前の2001年11月12日を退院日と決め、自立に向けての最終的な詰めを開始した。

岐阜市には一日24時間の介護保障を求めたが、一日5時間に留まった。生活保護他人介護加算大臣承認額とガイドヘルパーから得る収入を足した金額476,100円で、一日24時間での1ヶ月の介護を賄うことになった。1ヶ月分の介護ローテーションが決まり、見切り発車と言われつつ、今井さんの協力依頼から5年、兎にも角にも自立生活はスタートした。

2003年、支援費制度の開始が目前であった。支援費制度が始まれば自薦登録ヘルパー制度は廃止されることになり、どこかの事業所にヘルパーを派遣してもらうことになるが、医療的ケア、同性介護、24時間365日の派遣、自立支援…を行っている事業所は皆無で、当事者の意志を尊重した介護、自分たちがしてほしい介護を得るには自分たちで事業所を作るしかなかった。2002年秋、事業開始に必要な法人格を取得し、2003年4月居宅介護事業所「つかいぼう」（居宅介護、移動支援）、続いて「サポート」（日常生活支援）を立ち上げた。（その後「サポート」は廃止、「つかいぼう」1か所に統合）

今井さんと共に24時間の介護保障を目指して毎年交渉を行い、少しずつ時間数は伸びていったが、2006年に一日24時間が叶えられるまでは事業所の持ち出しで生活を支えた。時間数が足りなくても、とにかく生活実態を作り、生活をしながら当局と交渉を続けるというスタイルで幾つかの自立支援を行った。今井さんの真摯で前向きな生活は健康面で大きく崩れる事もなく順調に続いたが、退院して10年目、満50歳と自立生活10年目を祝う会を催す前日の2010年11月27日に入院し、4日後の12月1日に亡くなった。彼の退院以降、現在までに5名の方が退院し、いまその流れは更に大きくなって続いている。

2012年4月、介護職員等による吸引等の開始と同時に事業所を登録特定行為事業者として登録する。これまで違法性の阻却で行っていた痰吸引は制度的に認められることになった。また自立のために行ってきた相談や様々な支援は、一般相談支援事業（地域移行・地域定着支援）に制度化され、特定相談支援事業と共に実施している。どちらも利用のしづらさや不十分さは残すものの、必要性が認められ公的なサービスとして存在する事は当時と隔絶の感がある。

居宅等介護事業を開始して10年が過ぎた。地域で自立的に暮らす障害者の姿を見る事はあまりない。事業を行っている以上利用者を選び好みは出来ないが、あちこちで元気に動き回っている障害を持つ仲間の姿があればいいと、そんな仕事したいとひそかに思っている。それでも少しは地域に留まり、施設を選ばず家族と暮らし続ける事の応援は少しは出来ている節もある。

福祉に人気がなく、慢性的な人不足が続いているというより年々深刻になっている。地域や在宅への願いは強くなってきているのに、福祉の中でも在宅の仕事は特に選ばれないように思える。一人一人の生き様に関わり支えられるこんな素敵な仕事なのに、なんでだろう。ヘルパーの養成研修を繰り返し行う事、仕事の良いところのアピールが必要。



人口呼吸器を付けて自立生活を始めた今井さん

介護が公的サービスとして利用できる事、ヘルパーが付く事は、利用する人の生活を支援する事、人権を守る事で非常に大切だが、介護は常に仕事として行われるもの、介護はヘルパーの仕事だけになってしまわないか気になる。その時々でかわる人間が自然に介護できる事が大切ではないかと思う。どこかの自立センターの運営する居宅介護事業所のキャッチフレーズに「一緒にコーヒーの飲める関係」という言葉があった。もちろん介護料はなくコーヒー代は自前である。また、ヘルパーはどんな存在であればいいか。ある時は代弁者かもしれないけれど、

ある時は黒子のような存在、利用者のどのような決定も肯定的に受け止め、その結果にゆっくりと付き合う。今後、介護や家事等の技術だけでなく方向性（姿勢）に注意を払い、ヘルパーと利用者で共有する機会を作りたい。

自立生活の支援をするにはある程度の自立体験の期間が必要なのでケアホームの利用が、年限を決めた障害者アパートのようなものがあると良い。

ヘルパーとして関わることで、共生社会をつくることに繋がる仕事を目指したい。

自立支援活動がもたらしたもの

副理事長 後藤篤謙

1970年代頃より日本各地で、いわゆる自立生活運動と呼ばれる障害当事者が地域で暮らすことをめざす活動が展開され、ここ岐阜においても諸先輩方によってそうした取り組みが手探り状態で試みられてきました。そして1980年代に入り、つっかいぼうの設立と前後して、私たちの周囲でも施設や親元を離れ、地域で暮らす仲間が出てきました。一人はつっかいぼうで自立体験を繰り返していた花村美智子さん、もう一人は国立長良病院（現在の長良医療センター）を退院された高橋徹さんです。

当時は地域で暮らす障害者を支援する各種制度が現在と比べはるかに不足していて、彼らの生活は多くのボランティアや友人の協力によって支えられていました。今日のようなヘルパー制度が整っていない中で生活は、介助者の確保など大変なことも多かったものの、何事にも代えられない大きな充実感と喜びがあったそうです。

そして時は流れ2001年、人工呼吸器を使用し一日24時間介助の必要な今井隆裕さんが、長良病院を退院して自立生活を始めました。今井さんの自立生活においても、当会はその準備から生活の開始、継続まで全力で支援を行い、彼と二人三脚で重度障害者の地域での自立した生活の実現をめざし取り組んでまいりました。

この今井さんの自立生活開始は、当時長良病院に入院していた仲間たちに大きな刺激を与えました。なにしろ医療的ケアが必要な最重度の筋ジストロフィー患者が、完全看護の病院を退院して地域で暮らす訳ですから、その衝撃の大きさは想像に難くないでしょう。しかも、毎日の生活を支える介助者は、ボランティアではなく有償のヘルパーというではありませんか。それまで地域で暮らす障害者は、ボランティアや友人の献身的な協力の上になんとか生活を成り立たせているものばかり思い込んでいた人たちにとって、それは驚きでした。

そして、長良病院で入院生活を送っている人たちの中に、「これなら自分にもできるかもしれない」「自分も退院して地域で暮らしたい」という思いを抱く人が一人また一人と現れました。残念ながらいまだその思いをかなえられないでいる方もいらっしゃいますが、何人かの仲間はその後施設を飛び出して、それぞれの場所でそれぞれの生活を送っています。さらに現在も、新たに地域での生活をめざし動き出している仲間がいます。

ここに登場した花村さんも高橋さんも、今井さんも、皆さん残念ながら今では故人となりましたが、彼らの行動の一つ一つがあったからこそ、今日の障害のある仲間たちの地域での自立した生活があるといっても過言ではないでしょう。彼らがいたから、当会も彼らとともに支援体制づくりや行政に対して制度の充実を訴え、重度障害者が地域で生きられる環境づくりに取り組むことができましたし、何より地域の中でいきいきと生きるその姿は、あと一歩を踏み出すのをためらっている人たちに希望と勇気を与えたに違いありません。

私たちの力が及ばず支援の手が行き届かない場面も多くありますが、少なくともある一部の方々には、どんなに重い障害があっても地域でくらしたいという先輩方のメッセージとともに、それを実践する取り組みが静かに受け継がれています。その流れが絶えることなく、さらに力強いものに育っていくことを願いながら、これからもこの活動を続けてまいりたいです。

共に働く場を目指して

理事長 吉田 朱美

つっかいぼうがいわゆる仕事のようなものに取り組んだのは、1990年のカレンダー販売である。しかしこれは仕事をしようと始めたのではなく、仲間たちに自主的に動き、責任を持って行う事に取り組んでほしいと思うことがあって提案し始めたと記憶している。

まず、50本のカレンダーを人の手を借りながら出来る方法で自分たちのペースで売れたらいいと思い提案した。しかしメンバーの声掛けと日ごろつっかいぼうを支えてくれる人たちの協力で、当初の予定を大きく上回る150本のカレンダーが売れた。うれしさと勢いと自信で、他の物も売りたい、自分たちの仕事を持ちたいという強い思いに変わっていった。

1991年、まずは手始めに名古屋のわっばの会が製造販売を始めた無添加パンを月に1回注文販売する事から始めた。何種類かのパンに絞って注文表を作り支援者に郵送や手渡し、つっかいぼう周辺には投げ込みをし、注文が集まると集約し発注。伝票を書き、一人分のパンを入れる袋に購入者の名前を書きセロテープで伝票を貼り付ける。夕方パンが届いたら種類ごとに分けて、次は袋に一人分ずつ注文分を入れる。翌日から取りに来られる人に渡し代金をいただく。最後に代金を確かめ利益を貯金する。

チラシの作成、集約、伝票書きといった事務作業は事務局側で行い、障害のある仲間が仕事がある前日からつっかいぼうに泊りこみ、ボランティアに作業の指示をするのが仕事だった。泊りこみで販売に関わる障害者が3名になり、取扱う品に安全な石鹸やラーメンが増えた。泊まり込みは、自立生活体験を兼ねた。

配達を手伝ってくれる人も現れ販売を月2回に増やすことが出来たが、ボランティアに頼って行う仕事には限界があり、毎日仕事がしたいという思いから、制度を利用して働く場を作ることにした。資金は仲間を出し合った。設立時のメンバーは脳性麻痺者を中心とした全介助の必要な重度障害者が大半なため手作業を主とすることは困難と考え、口を使って出来る仕事と考え販売業と決め、役に立つ物を扱いたいという思いから、既に扱い始めた自然食品を売ることにした。

1992年12月、自然食品の店つながり亭は開店し、1993年6月からは障害者小規模通所施設としてスタートした。岐阜県では初めての物販の作業所としての申請で、障害者の作業は手作業という考えが主な中、認可されるのに時間がかかったと聞いている。

店売り、宅配、行商、バザー、施設等への出張販売、季節商品の注文販売等思いつくことはやってみたが、なかなか売り上げは伸びなかった。

時々手伝ってくれるボランティアと違いいつも仕事をしている職員に指示をする事は仕事にはならず、障害者スタッフは行商やバザーに励んだ。商品を持って柳ヶ瀬に行き「いかがですか」と道行く人に声をかけたり、車いすで入れそうな場所に行き飛び込み販売をした。手の使えないスタッフはお客さんが商品を選び、つり銭も箱から自分で取り出してもらうというセルフサービスの販売であった。初めは躊躇する人もあったが、次第に受け入れられ、いつも立ち寄ってくれる人や中には自立生活の介助ボランティアに来てくれる人もできた。またバザー等での販売は職員や親がほとんどであった中、障害者自らが販売する姿は人目を惹き、他の作業所からも障害者の参加が増えていったように思う。障害者が外に出て見知らぬ人と関わりを持つことは、今の社会では仕事と言ってよいのではないかと話し出かけて行った。

徐々に障害者スタッフが増え、店が非常に手狭になり2か所目の作業所の検討に入るが新しい仕事の目途が立たず、製造の経験のある職員の提案からリサイクルキャンドルの製造を1996年よりつっかいぼうで始めた。珍しさもありバザーなどではそこそこ売れた。1年近くを試作や講師を探しての研修の後、工夫すれば色々な種類を作ることも可能であり2か所目の作業所「ロウソク工房ヴァリエーション」として申請した。前後して「つながり亭」は定員を20名に増やし竜田町に移転した。



柳ヶ瀬での街頭販売



キャンドル製作風景

地場産業の衰退から柳ヶ瀬の人通りが少なくなってきた事、行商の場所が少し遠くなり自分では行けず送迎が必要になった事が一番の理由だが、設立メンバーの高齢化とメンバーに知的障害の仲間が増えて行商のペアが組めなくなった事から、従来の行商は困難になり機械部品を磨く内職仕事を始めた。

キャンドルの方は、果たして仕事として成り立つのか心配であったが、全国的にも製造をしている所はほとんどなく、珍しさもあり現在も続けている。

作業所の運営で、目指したい事が幾つかあった。それは「どんな重度な障害者でも働ける、働くことで一人一人の障害者が社会とのかかわりを作る

事、生活ができる工賃を得る事、一人一人の自立的な生活を作る事」である。

作業所に通っていても介護にあたる家族が倒れれば障害を持つ者の日々の生活は崩れ去り、通所を続ける事はできなくなる。家族の状況に左右されない自分の生活を作る事の支援が重要である。年金や生活保護の手続き、障害福祉サービスの利用援助やつかいぼうでの自立体験、家探しの手伝い、介助ボランティアの調整等を行う中で何名かが自立生活を始めた。後の居宅介護事業所の立ち上げとなる。また生活の幅が広がるよう公共交通機関の利用の援助や、自動車学校や定時制高校への入学なども進めた。結果、新たな仕事を見つけ退所する人がでてきた。当時のつかいぼうは障害者が職員として働く場は作れなかった。

仕事においては全身性の身体障害を持つ仲間の仕事を行商以外に作り出すことができなかった。

2006年、障害者自立支援法が施行され、作業所は5年以内に就労支援の新体系に移行しなければならなくなった。新体系は定員が最低でも20人以上で、新しい場の確保が必要となった。

市は早期に新体系に移行させるために作業所の補助金を年々減額し、運営が年々苦しくなる中で、移行先を「就労継続支援B型」と決め、建物の確保や工賃を上げるための作業内容の見直し等を行うために定期的に会議を持ち移行の準備を進めた。

2010年、ひとまず二つの作業所を一つにして地域活動支援センターに移行した。その間で建物は用地を購入し建設をすることに決定したが、社会福祉法人以外にも建設に対し国庫補助が下りようになり、申請の準備の遅延を遅らす事にした。

2011年8月、交付が決定し、2012年3月に建物が完成し、同年4月より就労継続支援B型事業所「ピー・カンパニー」がスタートした。

定員30人で、これまでの仕事以外に自然食の食堂とジャム等の加工品の製造販売と、ハンガーの組み立てを始めた。そして今1年半が立つ。自然食品の販売は宅配や施設販売が主になり、行商は廃止したため障害者スタッフの関わる仕事が少なくなってしまった。

現在、食堂のお客さんの入りは日によって異なりあまり多くはない。しかし福祉とは関係のない人達に障害者の働く場を知っていただけの事や、自然食や環境を考え有機農業を行う人達や福祉とは別のところで共生を考えている人たちとの出会いがあり、この広まりを大切に育ててゆきたい。仕事面では接客や食器洗い、店内の掃除、調理の下準備の一部等、障害者スタッフが関われる仕事を少しずつ増やしている。自動車部品の仕事が少なくなり、ジャム等の加工品の製造・販売に力を入れていく。そのための原材料の確保や販売先の拡大、そして仕事の仕方の工夫等の課題も多い。出来る限り障害者のための仕事を増やすだけでなく、障害のある人もない人も一緒に働ける普通の仕事を目指したいと考えている。

しかし、まだ障害者スタッフの人数が少なく運営が相変わらず厳しい。

工賃のつけ方については、開設以来、日給は全員同額であったが、2013年度より一部出来高制を導入した。日給が同額だと工賃に反映されるのは通所日数のみで、生産の大きな差が反映されない点がある。どのような方法で分配するかは重要な問題で、簡単に全員が納得出来るものではないように思うが、収入がある程度の大きさになるまで一部出来高制で行う事にした。

今回、作業所として初めて土地・建物を取得した。この先ずっとこの場所で働き、生活の場を持つ可能性もある。地域の人に障害者に対する理解を得られ、交流が図られるよう年に何度か周辺200～300軒ほどに

通信の投げ込みと、年1回の地域交流祭りを開催している。祭りの参加者はまださほど多いとはいえないし、企画、内容、取り組みともに反省すべき点は多いが、開所2年目に入り、施設の知名度や関心を寄せてくださる人達が少しずつ多くなったように見える。

障害の有無、部位や程度を問わず、自分の持てる力を出し合い一緒に働ける仕事をして高い工賃を得る、安心して働き続けることが出来るような生活環境を整えることを目指してはいるが、現状では多くの介護の必要な人、支援に専門性を求められる人への対応が力不足と人不足でなかなか困難な状況である。地域で安定した自立的な生活を送るためにはケアホーム作りや、地域の人とのつながりを作っていく必要性も強く感じている。

様々な障害を持つ人が障害のない人と共に、障害の特性に合わせた仕事を分担しながら一つの仕事をする事は困難な事だろうか。ピー・カンパニーとして出来る事・出来ない事を見極め、出来ない事は法人としての取り組みに移していくこと等検討しながら、今後も地域で共に働き暮らすことを進めていきたい。



キャンドルナイトの取り組み



研修旅行



キャンドルの製作

交通アクセスの取り組み

理事 戸田 二郎

つっかいぼうは車いすを利用している障害者が中心になって活動を始めました。30年前ぐらいの公共交通は本当に使いづらいものでした。

バスは乗車拒否をされ、大変な思いをしなければ乗れない状況でした。片や電車とは言えば駅にエレベーターはなく、階段を行き交う人をお願いをして上げられなければならないもので電車の乗るまでに多くの時間を費やさなければなりませんでした。

JR（当時は国鉄）には貨物用のエレベーターがありこれを利用するのですが、設備が古くて途中で止まってしまったり危険を感じるものでした。

もっと利用しやすい公共交通をとの思いは全国的にも高まっていました。そんな中交通アクセス全国行動が取り組まれ、私たちつっかいぼうも岐阜の地で取組みを始めました。

1984年頃、岐阜駅の高架事業が行われ駅舎が新しくなるとの情報が入ってきましたが、エレベーターの計画はありませんでした。私たちはエレベーターの設置を求めて駅前でのビラの配布や関係期間への要望を続けてきました。

岐阜駅の改築の前に西岐阜駅の新築が行われ、西岐阜エレベーターの設置を求めましたが、構造的にエレベーターの設置はできない・場所がないなどの理由を持って、階段昇降機の配置をする事で設置されなかった。しかし、その後バリアフリー法が成立すると西岐阜駅にエレベーターが設置された。設置できないとする理由は一体なんだったのが行政当局に見解を求めたが、苦笑いするだけで、一切応えませんでした。

岐阜駅の改築にあたって、私たちは、開放型エレベーターが設置された名古屋市営地下鉄（桜通り線）や京都市営地下鉄の調査や、「いい旅しよう！京都」交通アクセス運動として、長野県・静岡県・愛知県・岐阜県各地から最寄りの駅で乗車し、東海道線大垣駅で全体が合流し、京都市営地下鉄の調査をした。

工事が始まって、根柢り強く開放型エレベーターの設置に向け、国会議員調査団を派遣してもらい、関係当局（国鉄・岐阜県・岐阜市）との交渉の場も持った。その場で当時の県会議員から「こんな形のエレベーターでは、10年後世間から笑われる」と指摘されたが、閉鎖型（駅職員が鍵を操作する）のエレベーターが提案され、私たちが求めた開放型エレベーター（鍵がなく誰でも自由に利用する事ができる）は残念ながら実現せず、全国的にみて現在ほとんど存在しない閉鎖型エレベーターになっている。まさしく交渉時に指摘された事が現実の形になっている。

全国的に誰もが利用しやすい公共交通を求める取り組みが行われ、その取り組みの中で運輸省・国土交通省に対して粘り強い交渉を全国の仲間と一緒に取り組んできました。結果、「交通バリアフリー法」が成立。その後「新バリアフリー法」となり、市内を走るバスがノンステップバスとなり、名鉄岐阜駅も改築に合せて、エレベーターが設置され交通アクセスは大きく前進した。

しかし、まだまだ問題点も多く、今後とも取り組みを続けていく必要がある。



駅の階段



ノンステップバス

理事・監事・職員・利用者 のみなさんの声



研修旅行にて

そして、今ここにいる ～遅れてやってきた仲間のひとり言～

副理事長 後藤 篤 謙

往々にして人というのは、自分の見知らぬものや経験したことのないこと、自分とは異なる価値観を持つ存在に対して、それを警戒したり否定したりしがちです。かつての私にとっての障害当事者運動やつかいぼうとは、まさにそういう存在でした。

幼少期に病気を発症し、6歳の時から家族と離れて施設での生活を続けていた私にとって、地域とは家族や趣味などを通じて知り合った友人たち、ボランティアさんたちが暮らす場所であって、憧れや羨望の対象ではあるけれど決して自分自身が暮らす場所ではないと思込んでいました。そんな私の眼には、地域社会とのつながりが希薄な（隔離されたと言った方がふさわしいかもしれない）施設のあり方に異を唱え、障害のある人も地域の人々とつながり、施設を出て生きていこうという思想や行動は、ともすれば現在の自分の生活や存在そのものを脅かすもののように映ったものです。

どこにでもいるただひとりの人として、普通に、当たり前前に生きたい…そんなの分かってる、そんな風にできちゃ苦労しないよ。できないから、できないなりに必死に某かの達成感や充実感を得ようと日々もがいてるんだよ。放っておいてくれよ、という感じでした。

また、様々な差別や不平等と闘うだなんて、そんなラジカルに、ストイックに生きるなんてまっぴらご免だ、とも思ったものです。それよりもっとスマートに楽しいことをして、あわよくば魅力的な異性とあんなことやこんなことをしたい、なあって考えていました。

当時、友人たちの中にもつかいぼうの活動に参加する人はいましたし、つかいぼうの関係者からもたびたび行事や活動へのお誘いを受けたりしていました。けれども、彼らの行動やメッセージは、なかなか私の心には響きませんでした。

さて、そんな私がある出来事をきっかけに、二十数年続けてきた施設での生活にピリオドを打ち、現在は介助者のサポートを得ながら地域で暮らしています。そればかりか、今ではつかいぼうの用務員のおじさん、いえ副理事長として、活動にどっぷり浸かった毎日を送っています。月並みな台詞ですが、人生というのは分からないものです。

私にとってのこのコペルニクス的転回とも言えるほどの変化をもたらしたものは、一体何だったのでしょうか。それは、先に書きました「ある出来事」に他ありません。これはあくまで私個人の身に起きた、ごく私的な出来事ですので詳しくは触れませんが、あるひとりの人との出会いが大きく関わっています。

要するに、人との出会いなんですよ。私の心に響いたのは、きらびやかな甘い誘惑でも一部のスキもなく理論武装した主張でもなく、魂を揺さぶるような喜びと哀しみだったのです。

いま私は、一障害当事者として地域で生き、何かでお困りの仲間を応援したり、会の運営や活動に携わって多くの方にその活動を広めたりする立場にいます。かつて私がそうだったように、いろんな葛藤を抱えながら生きている仲間たちが、自分自身の心の声にすら耳をふさいで気づかないふりをしたり、やっとの思いで理想と現実と折り合いをつけて生きようとしているのを肌で感じています。

私の生き方や行動がそんな彼らの心にどれだけ響いてくれるのが分かりませんが、これからもできるだけ彼らに寄り添い、一人でも多くの仲間が自らを愛し、生まれてきてよかったと思える瞬間を積み重ねていけるようにささやかながら取り組んでいきたいです。そして、障害当事者としてのアイデンティティを大切にしながら、つかいぼうの活動を通して私にとっての社会の中での役割を果たし、周りの方々と調和した人生を送りたいです。



自分とつかいぼう

副理事長 山内 ゆきえ

毎年暑い夏が終わり、心地よい風が吹き出すと、決まったようにカレンダー販売の季節がやってくる。

「今年のカレンダー販売のお知らせは。何本仕入れよう。」自分が書くときのすっかりマンネリ化した文章を思い出しながら「あっ、もしかして来年は長良有明町の古い借家にあったつかいぼうをみんなで借り、活動の拠点にしてきて25年かも？1988年、確かその年は岐阜では未来博があり、会場も近いつかいぼう付近はよく混んだりしていたな」と、つかいぼうが25周年を迎えたとハタときづく。

自分にとってのつかいぼうは、故花村美智子さんが、「山内さん、ちょっと古い借家だけど、道路からすぐ車イスで入ることが出来る家があったよ」ということを電話口で教えてくれたときから始まりました。1981年の国際障害者年があった数年前、朝日新聞厚生事業団のモニターになりもらうことの出来た電動車イスで、土日みんなで集まった翌日は決まって郵便局通いが自分の役割だった。土日つかいぼうにみんなで集まり、そこで集まった会費やカンパ金を郵便局に開設したつかいぼうの口座に入れるだけのことだったが、自分にははじめての重大なる「任務」だった。

荷物がいっぱい入り車イスの後ろに掛けやすい布の大きなバックをまだ新婚まもない義妹につくってもらい、毎回「なんで、そんなに荷物を多くするの？持ってもらう人のこと考えやあ」と娘の部屋からぶつぶつ言いながら出していた母。きっとわたしんち以外にもこのような光景も見られていたのかも知れない。

自分たちの活動拠点が出来てもそこまで行く足、手段がない。そのころ普及し始めたリフト付きワゴン車が、難病連の方から岐阜交通に委託され空いている時などは、岐阜交通に電話予約を入れて送迎を頼んだりしてつかいぼうに毎週通っていた。岐阜交通の大きなワゴン車に自分ひとりだけというのも何だか悪いような気がした。ワゴン車を運転する運転手さんはいつも変らず顔見知りとなり、長良病院にいる仲間も一緒に乗ってつかいぼうにという日もあった。ワゴン車の予約が取れないときは、中部女子短期大学の学生さんに自宅に来てもらい路線バスを乗り換えつかいぼうに行く。帰りの日曜日の午後か夕方は、運良く人が見つければボランティアの人の車で送ってもらったり、仲間の車に同乗させてもらい家に帰っていく。障害を持つ当事者は5、6人集まっていたので、いつも帰りの送迎を誰にお願いすればいいのかドキドキしていた。（もっともこんな思いは、この私だけだったのだろうか？）

毎週のように三光園や長良病院から外出許可を毎回のようにとって出てきてくれる仲間は、「小さいときから施設で暮らしているから、一人暮らしがしたい。異性介護はいやだよ」と切り出し、子宮摘出の話までに及び、しかも、夜の暗闇から東の空がほんのり明るくなるまでみんなで話すことはザラだった。

土曜の午後それぞれの時間につかいぼうに集まってくる。ほとんど毎週に近い状態でみんな集まっていたので、2日間を過ごすための買い物から始まり、それが当番制になっていたような気がする。自分に食料の買い出しが廻って来ると、自宅が八百屋で普段スーパーに行くことが少ない自分はちょっと楽しいひとときだった。

駅の改善や街づくりなどの情報も仲間から教えてもらい自分なりに学んでいくことも出来た。でも自分には何故か苦手な話題が「一つ」あった。それまで勢い全開で話していた内容が急に変わると、いるかいないかわからないような細かい声になってしまう。ひとり暮らし、自立のことだった。仲間の中から土日以外使われることの無いつかいぼうで、自立に向け自立生活体験に踏み切る仲間も出て、内心追い抜かれたと思ってしまった節がないわけでもなかった。

そんな時つかいぼうの一人の仲間から、「家で親と一緒に暮らしていても自立は出来る。もう自立生活することなんか考えないで」と言われた言葉が今も自分の頭の隅に干からびかけていてもちゃんと残っている。つかいぼうから1人2人と「自立」をして行く仲間がいたとき、当時の仲間に素直にいます。「自分には親にとことん反抗し、根気よく説得する勇気がなくなかなか踏み切ることができなかった」と。

つかいぼうができて二度目の秋を迎えた頃、モムのカレンダー販売の話が持ち上がったリカルタ取りの話が仲間から出て、その頃のつかいぼうはとても活気があったような気がする。

「みんなでお正月にするカルタもただ見ているだけ」という情報をひとりの仲間から聞き、それだっ



初期のカルタ

たらでっかいカルタを作り車イスで取れるのではないだろうかと考え出したカルタ大会の誕生。1m四方のダンボールに自分たちの思いや社会風刺を込めて作ったオリジナルカルタ。もうあれから25回も開催してきているのだな。だからカルタの匂も浮かばなくなったかもしれない（自分は）

このカルタ大会を始めた頃、ちょうど東京ドームが新しく出来た頃だったのでこのカルタ大会を広め、各地区予選を開催し夢はでっかい東京ドームでと言っていた頃もあった。これは実現しなかった。

カルタ大会開催と同時にそのころのことで記憶に残るのは、やはりモムのカレンダー販売のことであろう。みんなで50本のカレンダーをどう売ろうかと頭をひねってさばく。土日のつかいぼうでの活動で身に付けた販売手段で、家に帰り電話をかけたままにしているとちょうどその頃片言を喋り始めた甥っ子も受話器を持ちセールスの真似。そんな甥っ子も今や青年。毎年新しい固定のお客を増やしていくのが理想的だけど、残念ながらほとんど平行線をたどり気味。

でもカレンダー販売を始めてから毎年、「カレンダーを楽しみにしているからね」と買い求めて下さるお客さんもできている。この場を借りてありがとうと感謝の気持ちを伝えたいと思います。

でもこのカレンダー販売で残念に思うことがひとつある。それはやはり共にカレンダー販売をやってきた花村さんが亡くなったことだと思う。カレンダー販売の時などは、販売先のセールス、在庫、金銭管理などそれまでやったことが無い二人がお互いに頭を絞りながら進めていく。

まだ「モムのカレンダー」の販売をし始めてまもない頃、一緒にやっていた仲間が、「山内さんモムのカレンダー、印刷ミスだよ。だって1月と2月があべこべになっているもの。きっと印刷ミスだよ」まるで勝ち誇ったかのように電話をしてきた。でも他の仲間にカレンダーを発行している事業所に問い合わせてもらったら、奇数の月が終わってその箇所をさみで切れれば次の奇数の月が現れ便利になって、いわばそこがモムのカレンダーのポイントとのこと。

25周年に向けての原稿を書き出した今、毎年今ごろからカレンダー販売にとりかかっていたので「もうそろそろ」という節がある。

年月はもうスピードで流れてしまった。あんなに自立生活、一人暮らしを拒み続けていた自分が今こうして琴塚の家から出て生活している。ちょうど前の障害者自立支援法が出来て、その風にも乗かって自立支援法もないころ、自分の生活を存続させるため、日夜「人探し」をしていた「自立生活の先輩たち」に比べたら楽になりすぎてもうしわけないという思いが時々してくる自分である。

5、6年前JR岐阜駅の高架やその周辺も以前と比べて使いやすくなり、自分も駅から割りと近いところに住むことが出来、バスや電車などの公共交通機関を利用するようになっていく。

子供の頃から決断するまで、時間のかかる自分、今も相変わらずだけど、つかいぼうの仲間が「つかいぼう」となり支えてくれている。

よく自分の「足」がない時つかいぼうまで送迎してくれた母が、一年間の闘病の末一昨年の春亡くなった。まれなる病気の発症から、週に2日はヘルパーさんの車や路線バスに乗りヘルパーさんと病院に母を見舞い、自分なりの母との別れが出来た。このことでもつかいぼうの仲間や自分に関わってもらった多くの人々と母を見送ることができたことに感謝。

昨年春、日頃の不摂生?と風邪が元で「誤嚥性肺炎」となり、食べ物の形態の方も変化している。「嚥下食」という聞きなれない言葉でもびっくりすることなく、真新しいオルタ食堂で、山内のために嚥下食作りを。

もうこれからは年齢的には、何をして暮らして行こうという時期にさしかかって来ている。カレンダー販売の季節がやって来ると、数年前から「ぼつぼつ次のカレンダー販売の後継者を見つけないと」ということが仲間内では話題となっていたが、なかなか切り替えることも出来ずに来ていたが、昨年からは、「作業所で」ということになりつつある。「山内、カレンダー販売からも引退」ということも無く、出来る範囲でお得意の「ロコミ」を使って自分なりの販売をと思ったりする。

そしてこれからは、一人暮らしを始めた頃「自立生活はいいものだ」と実感した思いや、いまだに伝え切れずにいることを多くの仲間積極的に伝えたり、もっと誰もが暮らしやすい街、移動しやすい交通アクセスなどつかいぼうがこれまでやってきたことを、自分の「ライフワーク」としてこれからもやっていくことがつかいぼうでの役割ではと思ったりしている自分です。これからはよろしゅうに。

目指すところ

就労継続支援B型事業所ピー・カンパニー

施設長 服部昌紀

法人設立から25年という活動の歩みの中で、障がい者の通所施設は「自然食品の店 つながり亭」が徹明通りで産声をあげ、岐阜市内の小規模作業所では初めてであろう自然食品の小売業を授産活動にし、柳ヶ瀬や新岐阜駅周辺での行商販売を主に行っていた。販路拡大や自然食品へのニーズもあり、市内はもとより各務ヶ原市などへの宅配も行い、順調に授産活動が拡大していた。

1998年に竜田町に移転した冬からつながり亭で働き始め、現在にまで至るが当時の作業所のメンバーにも恵まれ、ふざけていることも多々あったが、健常者と障がい者というよりも一緒に働く者同士がつながり亭を支えあって活動していた。

今から思えば、障がい者が、健常者が、職員が、利用者がなんていう雰囲気はなくお互いが対等に働く関係性があり、今の制度の支援する・される、指導する・されるなんて言う上下関係的な関係ではなく、障がいがあろうとなかろうとすべてのスタッフがあるべき力をだし、持つべき責任を持ち、お互いが一生懸命に働いていた姿は、目標にすべき働き方なのだと思う。

今の作業所のすべてのスタッフに願いたいのは、だれが上でもなく下でもなく、また、だれもが当たり前にいる中で、やるべき仕事と任された仕事の責任をどのように果たしていくのかを考えながら、みんなで活気に満ちながら働いて行けたらと思います。

ピー・カンパニーも2年目を迎え、各場の仕事を充実させていく環境は整いつつあると思います。また、新規に始めたオルタ食堂も開店して1年が経ち、やっと、少しずつですがみんなが活躍し始めました。

これからの目指すべき姿として、すべてのスタッフが働いて活躍できる場とだれもが地域で暮らしていくための活動拠点としてピー・カンパニーが想い描く地域づくりをしながら、私もピー・カンパニーと共に飛躍しながら成長していきたいと思っています。

つっかいぼう居宅介護事業所管理者として

居宅介護事業所つっかいぼう

管理者 石井一樹

自分がつっかいぼうと関わることになったきっかけは、大学の時に所属していたサークルでした。

福祉に興味はあったのでサークル活動を通してつっかいぼうの活動の『ともに生きる社会の実現をめざして』に徐々に興味を持ち、卒業して就職させてもらいました。

最初の数ヶ月は死に物狂いで障害者の自立生活について東京に研修に行ったりしていました。

というのは、重度障害者の自立生活支援や介助のコーディネートをすると目下当面の緊急性の高い役割がありました。その中でも力を入れたのが介助者の募集でした。共感してもらい、少しでも関わってもらえる人を増やさないとには、その先がないと思っていました。そんな中、その年の秋に一人の呼吸器を常時使用していた重度障害者の自立生活が幕をあげました。手探りの中、いろいろな方に迷惑をかけながら、ちょっとずつ進んでいく中で制度も未整備だったのがなんとか整備されてきて、つっかいぼうも事業所としてやっていけるようになりました。

今では、多くの利用者様やヘルパーさんに支えられてやっていくことができています。本当にありがとうございます。感謝してもしきれないくらいです。

『地域で障害がある人もない人もともに生きることの出来る社会』が少しでも実現出来ていたら嬉しい限りです。つっかいぼうの歴史からみたらまだまだ浅いですが…。

これからもどうか宜しくお願い致します。

25周年によせて

就労継続支援B型事業所ビー・カンパニー
山本正喜

つかいぼうの家で「障害があっても地域で暮らしたい」と願う仲間達が集まり、パンなどの販売をはじめたのが、「働く場」の始めの取り組みでした。重度の身体障害があってもできるという理由で販売を作業内容とした「つながり亭」は、店舗自体が作業所というのもめずらしく、小さいながらもいつも利用者・職員ということなく入り乱れてごちゃごちゃとしており、障害者だけで柳ヶ瀬や新岐早で販売をするスタイルや、自然食品を取り扱うことで、それなりに地域にも認知されていったように思います。

その後、2つ目の作業所「ロウソク工房ヴァリエーション」が開設。私はその頃からメンバーとして働いていますが、そこでは、キャンドルを作る様々な工程で誰もが何かの作業ができるように工夫し、みんなで一緒に作り上げること、そして、品質を一般市場に通用するレベルに上げることを目標にしてきました。

2つの作業所の合併を経て、就労継続支援事業として一昨年にスタートした「ビー・カンパニー」は初めての法人所有の建物での事業です。長らく、自然食品の販売、手作りキャンドルの製造販売、内職の作業をしてきましたが、より多くのメンバーがたずさわる作業を新たに始められるようにと、飲食業と食品の製造業の許可をとるための設備をすることができました。自然食レストラン「オルタ食堂」を初年度7月にオープンし、現在障害者スタッフ2名が店内の仕事の一部を担っています。この1年ほどは、ジャムの製造に取り組みましたが（地道に売り上げています）、今後は利益率を上げ、仕事の種類、量とも増やしていけるように自主製作品を増やしたいと考えています。

この25年の間には、人の生活様式も変わり、福祉制度の面でも利用できるサービスが増えて障害者の暮らしも便利になりました。作業所メンバーは何人かが入れ替わり、作業所に来る目的も変わってきています。作業所は工賃をかsekだけの場ではないですが、働くことで社会参加をすること、収入を得ることは、障害者に限らず地域で暮らすことの基盤であり、多くの障害者はそこから疎外されたままになっていると私は思います。働くことが、地域で暮らすための一助となるような「働く場」を目指しているか、ということをお忘れず取り組んでいきたいとおもいます。

成功、失敗より大事なこと

居宅介護事業所つかいぼう
山本剛史

現在、私はつかいぼうでヘルパーをしています。つかいぼうとの出会いは、14年前。「福祉の勉強をしながらお金がもらえるなんて、こんなにプラスな事はない。」と思ったことがきっかけでした。今は亡き今井隆裕さんのヘルパーとして、福祉を始めました。

慣れない包丁さばきでキャベツの千切りに10分近くかかったり、エビフライを高温で、しかも長く揚げた事で、今井さんから「固い。衣取って食べさせて。」と言われて、ただの蒸したエビみたいになったり（笑）。あーでもない、こーでもない、色々相談したりして…そこには、今井さんと笑いあっている自分があって、「一緒に転ぶ」楽しさを感じていました。本当に良い思い出です。

今井さんがいつも口にしていた言葉があります。『自己選択・自己決定、そして自己責任。』です。

自分で選び、それに自分が責任を負う。今井さんは、こんな当たり前の事が制限され、生きている意味を自問自答しながら生きてきたんだな。と、胸が熱くなったのを覚えています。

『自己選択・自己決定、そして自己責任。』この言葉は、今でも自分の福祉に対する想いの原点であって、福祉感の土台になっています。

現在、自分は知的障がい、発達障がい者の方の移動支援に行くことが仕事の大半を占めるようになりました。知的障がい、発達障がい者の方の『自己選択・自己決定、自己責任』というのは、身体障がい者の方にとってのそれよりも、支援者のサポートする気持ちと、何より工夫が必要です。

本人は何がしたいのか？何をこちらに伝えたいのか？その言葉は本意なのか…？こちらがルートを決めなくてはいけない場合もありますが、基本的には本人の自主性を活かしてあげたいと思うのです。そう思えるのは今井さんの言葉があったからだと思っています。障がいの有無に関わらず、生きているって楽しいんだって感じて欲しいのです。

色々書きましたが、つかいぼうに来て学んだ事はたくさんありますが、1番の収穫は「自分の人生は成功でも失敗でもいい。自分で決めたい。こう思うのは誰でも一緒。」と気付けたことです。

これからもよいヘルプができるようにしていきたいです。これからもよろしくお願いします。

介助者として

居宅介護事業所つっかいぼう

小川 大

つっかいぼう創立25周年、おめでとうございます。

自分はヘルパーとして5年程関わらせていただいています。出会いは大学の後輩からの紹介でした。大学卒業後は教育関係の道に進むつもりでしたが、念願かなわず…そんな時に紹介されたのがつっかいぼうでした。

入社当初は本当にこの仕事を続けていけるのか不安で、どうしようもない気持ちになることもありました。仕事に行くことが億劫になり、ひどいときには体調にも出ることもありました。また仕事内容においても、目の前の仕事をこなしていくのが精一杯でした。機械的かと言えばそうではありませんが、相手の気持ちを考えて介助することが出来ていなかったように思えます。元々この世界に入るとは考えていなかった為に、知識が不足していました。今考えていけば、知識だけでどうにもならないことばかりなのですが…（笑）。障害の特性や介助技術等、理解出来ていなかったことを反省し、少しずつ…亀の歩みぐらいですが成長してきたのでは？と思っています。

自分の中での福祉に対する考え方は、まだ定まっていません。それが良いのか悪いのか…自分は一応若いはずだから、色々な考えに触れることが出来ると言い聞かせています。その中で「これだ!」というものに出会うか、はたまた自分で見出すか…こんなことをいうのはあれですが、すごく楽しみです。

考え方が定まってはいませんが、一定の目安（目標）として、2013年には介護福祉士を取得させていただきました。今後、更に資格を取得していきたいと考えています。

現在、「自分は一人前です!」と胸をはって言えるかと問われると…正直自信はありません。確実な介助と臨機応変な介助の連続で、まだまだ対応が出来ていないです。しかし、入社してからを考えると、こんな自分ですが確実に成長はしたと実感しています。何より環境に恵まれていると思います。職場の方々や利用者の方々に日々助けられてここまでられました。より一層介護というものを真剣に考えていきたいと思っています

つっかいぼうに関わって

居宅介護事業所つっかいぼう

松本 景子

私がつっかいぼうに関わり始めたのは、もともと障害の勉強がしたく、また、当時住んでいた自宅から近いところにつっかいぼうの事務所があり、たまたま介助者募集のチラシを見て応募したのがきっかけでした。

大学に通いながら、当時専門としていた児童と関わり、今まで出会ったことのない障害を勉強させていただき、また、卒論などでもお世話になり、制度や必要な支援など、多くのことを学ばせていただきました。

特に重度の方は、着替えや移乗、食事などの身体介護から、掃除や洗濯、調理などの家事援助、移動支援がすべて一つになっているため、覚えることが多く、入り始めのころはとても大変でした。

一人一人に合った支援が必要になりますが、制度や時間の問題など、色々難しい面が多々あり、また、突発的な支援に関しては、動けるヘルパーが少ないなど、生活する上での様々な弊害があると感じています。

昨年度より、コーディネーターとして関わらせていただくようになり、また、様々な研修に参加させていただき、ヘルパーで入っていた時とは違った視点で関われるようになってきました。

その中でもヘルパー研修の仕方など、利用される方の個々の要望にできるだけ沿えるようにつなぐ、解りやすく説明しなければいけないため、難しさを感じています。

今後も利用される方と密に連携を取りながら、より良い支援をしていければと思っています。

つっかいぼうに関わって

就労継続支援B型事業所ビー・カンパニー

本 望 睦

ビー・カンパニーが開所して2年ぐらいたち、私は、ロウソク部門の方を中心となって作業などを行っています。

まだ2年ぐらいなのですが最近私の力不足と思うような所があり、一つは売上だったりするのですが、それよりも痛感させられるのがロウソクの方で関わっている障害者の言葉で「仕事をしていて最近、達成感がないから面白くない」と言う言葉が響きました。

聞いた時はショックでしたが、言われても仕方がないかなとも思いました。

ロウソクの事に関して商品などの製造を行っているのですが、最近は、メリハリのない作業をする所があったり新作の商品の開発でも中途半端に終わってしまう姿がありと、モチベーションを下げてしまうような行動を許してしまっていた私もいました。そのために私とロウソクに関わっているメンバーとの考えがずれている場面もありました。思い返してみると改善しないといけない部分があるなと反省をしました。

現在している事は、みんなの考えがずれないように、これから作る商品や目標など話し合いをしていながら、ロウソクメンバーが達成感が得られる仕事をしていきたいと思えます。

私の目標は、ビー・カンパニーのメンバーに達成感を得られる仕事を作っておける事や、作りたいロウソクを実現できるような力を付けていく事、ロウソクをいろんな人に知ってもらいたい事です。そのための行動は、とれていませんが実現できるようにがんばっていきたくです。

ビー・カンパニー パートの職員さん

松 井 広 美

私の場合は障がい者水泳が縁でビー・カンパニーと出会いました。大会で会う障がいの有る彼らの姿を見て、ビー・カンパニーの皆が、彼らの様に何事にも一生懸命努力し充実した日々を送れるお手伝いがこれからも出来たらと思っています。

平 木 真 知 子

私が入社して約7ヶ月になります。面接時に会社の理念を知り、ここで働きたいと思いました。皆と楽しく関わりながら障がいを持った人達の気持ちが少しでも分かる介護士になれるよう、こちらで学んでいきたいと思えます。

障がい者手作り
ろうそくが50種類
岐阜で展示販売
障害者が手づくりし
たろうそくの作品展が



手づくりのキャンドルが並ぶ会場—
岐阜市神室町のレンガ通りテラスで

十九日まで、岐阜市神
室町のレンガ通りテラ
スで開かれている。木
々とともに制作、クリ
スマスは休み。
同市元浜町の地域活
動支援センターでつな
ぎ販売している。

つながり亭からビーカンパニー

就労継続支援B型事業所ビー・カンパニー

紺谷由美

私はつながり亭に入ってから、結構な月日が立ちます。つながり亭に入る前までは、何もしてなかったのですが、すごく不安でした。私はこれからどうして行けばいいのかわからずずっと悩んでいたのですが、つながり亭に行ける様になってとても良かったです。教えてくれた友に感謝です。

生活の方は、つながり亭に入るまでは、親と一緒に暮らしていたんですが、吉田さんと田島さんに色々教えてもらいながら、障害者制度の事を知って、年金とつながり亭の給料で一人暮らしができるようになりました。

つながり亭に入ってから、自分ができないと思っていた事が色々できる様になっていったので、とても嬉しかったです。つながり亭に入ってから、私の人生が変わりました。

自分も障害を持っているのですが、私より重たい障害者の人が、1人暮らしをしていたのがビックリでした。その人たちをみていると、大変な部分もたくさんあるけれど、できない事は手伝ってもらったりしながら、自分の生活をしているので、すごいなと思いました。いろんな障害を持っている人はたくさんいるけれど、お互い助け合えばいいんだなと思いました。

仕事は車いすで街に出てパンやお菓子を売りに行き、初めは声を出すというのが恥ずかしかったのですが、パンやお菓子が売れてくると嬉しいので、声を出すのがだんだん慣れて来ました。

利用者が増えてきたので、もう一つの作業所ロウソク工房ヴァリエーションに移りました。

初めは、ロウソクはどこかで買えないかと、講習にいたり、道具とかどうしたらいいかと、いろいろ大変やったけど、キャンドルが売れていくとやっぱり嬉しかったです。バザーとか行っても、キャンドルを売ってる所はなかったので、すごく売れました。

初めは、水に浮かばして使うキャンドルとカップのブロックが入ったキャンドルを作っていました。毎年1コは新商品を作ろうと話して、沢山キャンドルの種類が増えました。

今はキャンドルを作っている所が増えてきているので、危機感があります。

つながり亭とヴァリエーションが一緒になって、ビー・カンパニーとなって、キャンドルの方はバザーに行くのも減っているし、クッキーやパンと一緒に売っているの、どうしてもキャンドルの売上が下がってしまうので、キャンドルを作っているものとしては、残念です。クラフト展や自分たちが開催しているキャンドル展は、売れているので、嬉しいです。ずっとキャンドルに関わってきているので売り上げが年々下がってきているけれど、まだやっていきたいので、みんなで考えて、少しずつでも売上が伸びていいたら嬉しいな。

キャンドルだけではなく、つながり亭やオルタ食堂の仕事も自分ができることは何でもやって行きたいです。みんなで頑張っていこう。作業所も大変だけど、新しく来た人が、ビー・カンパニーに来たい、来て良かったと思う作業所にしたいです。

私に関わってくれた人、関わってくれる人たちは本当に感謝しています。つながり亭と出会えて良かったです。私みたいな人がいっぱいいると思うので、これからもそういう人たちの支えになって下さい。

1/11 (静岡新聞) 静岡新聞社

自然ふしみの期待

岐阜に障害者就労支援事業所が完成

NPOの法人障害者自立センター「つながり亭」が運営する就労支援事業所「ビー・カンパニー」が岐阜市品川で完成し、十四日現地で完成式があった。六月には、事業所内に自然ふしみのレストランも新たにオープンさせる予定で、出稼者がメニューも決定している料理を販売する。

事業所は、木造平屋の二階建てで、面積は四百六十六平方メートル。前身の店舗跡に建設された。完成式には、関係者約三十人が参加した。

完成後は、事業所の運営を担う「ビー・カンパニー」のスタッフが、調理や接客を担当する。また、自然ふしみのレストランも新たにオープンさせる予定で、出稼者がメニューも決定している料理を販売する。

前身から定員30人に増員
将来に備え接客や調理手伝い経験へ

自然ふしみのレストランは、そのうちの一室（一六〇平方メートル）を市内の農家から仕入れた旬の野菜を中心にメニューをそろえる。調理師免許を持つスタッフが調理を担当し、障害者は接客や調理の手伝いなどの経験を得る。

完成後は、事業所の運営を担う「ビー・カンパニー」のスタッフが、調理や接客を担当する。また、自然ふしみのレストランも新たにオープンさせる予定で、出稼者がメニューも決定している料理を販売する。

ビーカンパニーで働く仲間

伊藤 嘉孝

今でもつかいぼうやビー・カンパニーに支援いただきありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

鷺見 美喜子

6年たちましたがまだまだロウソクができません。ロウソクがほんとのきにいったものができないのでくやしい。せけんのないロウソクをつくっていきたいです。

岩崎 かおり

つかいぼう25周年記念おめでとうございます。もちろんこれからもたとえ一人の人が入ってくれますと本当に何よりもうれしいです。またいつか入ってほしいです。楽しみにしています。

赤石 幸久

25周年おめでとうございます。これからも末長く頑張ってください。

青木 裕麻

私は入社1年目ですが、今まで通っていた学校とは違い、非常にゆったりとしながらも一人一人が責任を持ち、仕事に取り組んでいる姿に私も見習って行こうと思いました。

新宮 有紀

私は昨年の4月からビー・カンパニーに入社しました。入社当時に比べると、仕事のスピードが速くなったり、仲間との協力ができるようになりました。これからも頑張ります。

吉村 友里

25周年 おめでとう ございます。

いつも温かいご支援をありがとうございます。

友里共々、みんなと一緒に成長していけたら思っております。

これからもよろしくお願い致します。

水田 和宏

がんばりました。

浅野 哲司

いっちょう県名（一生懸命）ガンバッテいます。

清水 大樹

食堂の仕事を、なかないようにがんばりたいです。

伊藤 正裕

フックをつけるよと思ったがよくきをつけてやりたい。がんばろうかなあ。

力を合わせ餅つき

岐阜市の福祉施設利用者や住民交流者就労支援施設「ビー・カンパニー」で25日、餅つき会があり、同施設所、18歳から60代まで



餅つきを通して交流する利用者と住民ら
吉田 幸子・ビーカンパニー
岐阜市

の16人が通い、ろうそくを作ったり、併設の食堂のウェーターをしたりして就労の訓練をしている。
餅つきは昔ながらの石臼と杵を使い、利用者も支障者の力添えを受けながら体験。約9*のもち米を3回に分けてつき、あんなやきな粉を付けて味わった。同施設に通う青木裕麻さん（18）岐阜市は「餅つきは久しぶり。貴重な体験ができた」と喜んでいました。
会では、昨年、成人した利用者の吉村友里さん（20）同様に花と記念品を贈って節目を祝った。（小森直人）

つっかいぼうを応援していただいた みなさん

一緒に活動したみなさんからの メッセージ

障害のある人、ない人の交流を通してバリアフリー社会の実現につなげようと毎年開いている。
競技は、自走車いすと介護者付き車いすの2部門でそれぞれ個人



車いすでかるた取りを楽しむ参加者ら＝岐阜市長良福光、岐阜メモリアルセンター

車いすでかるた取りを楽しむ「第22回大カルタ取り大会」(OH！カルタ会主催、岐阜新聞・岐阜放送後援)が28日、岐阜市長良福光の岐阜メモリアルセンターで開かれた。

戦と団体戦が行われ、大学生を含む約130人が参加した。かるたの大きさは約1.5四方で、イラスト付きの計47枚。「車いすこわごと行く雪の

岐阜市で
大会 47枚、福祉テーマの句

道 あったらいいな滑り止め」や「入りたい店の入り口に段がありうらやましげに中をみている」など福祉をテーマにした句が詠まれると、参加者らは正解の絵札に向かって車いすを走らせ、心地よい汗を流していた。
(瀬見井芳信)



まず水着を買うことから始まった琵琶湖でのキャンプ
多くのボランティアによって参加者みんなが初めての湖水浴を楽しんだ

つっかいぼうと私

岐阜新聞

浦田直人

「つながり亭」が誕生する数年前、私は岐阜放送にいて、「障がい者問題」の番組を任されることになった。当時の私は、畑違いのスポーツとかを担当していたため、そうしたテーマとは無縁だった。そもそも学生の頃からそれらは社会制度に起因する矛盾であり、たとえば「ボランティアなどは『安上がり福祉』のお先棒を担がされているだけ」のような、偏った考えの持ち主だった。

最初はあまり気が進まなかったが、新聞社などのつてを辿って、吉田朱美さんに会うことができた。お宅に上がり込んで、お話を伺った。確かご両親もいらしゃったはずだ。吉田さんは快活には話してくれず（失礼）、打ち解けるには時間がかかったような気がする（私の気のせい）。吉田さんを取材したとき、「異性介助」はタブーだと知った。お願いするのではなく、話し、伝える障がい者は初めてだった。私は何も知らなかった。

それから30年近くが経った。ノーマリゼーションの考え方に会った。「青い芝の会」の根源的な問いに驚きを覚えた。全て吉田さんや戸田さんが教えてくれた。下呂温泉や京都の公共交通視察、琵琶湖の水泳に同行したこと。「Oh! カルタ会」の開催準備。筋ジストロフィーで亡くなった高橋君との思い出。彼の夜間介助の「真似事」をさせてもらったりもした。何もかも鮮やかに脳裏をよぎる。

公共機関のバリアフリー化が当たり前になったように、障がい者を取り巻く環境は、少しは向上し、私も皆さんとお会いして以降、確実に何かが変わった。「何も怖くなかった」若いころから、どれだけ視野が広がったことが。人の痛みがわかる度合いも多少だが大きくなったようにも思う。頼りない気まぐれな同伴者だが、皆さんとともに歩むことが出来、私の人生は豊かになった。本当にありがとうございます。

私とつっかいぼう

NPO法人ギフ福祉ネットワーク東部

細野俊和

つっかいぼう設立25周年を迎えて、誠におめでとうございます。

つっかいぼうさんとの出会いは、私が立正佼成会青年部担当のお役を頂いている時に、青年部たちから、ボランティア活動を行いたいとの声が上がリ、色々活動を紹介していただいた中に、障害者自立センターつっかいぼうを知り活動をしたのが始まりでした。

長良有明町の民家での自立訓練の為に青年を手配、メモリアルセンターでの大カルタ取り大会、夏にはみんなでやろまい会キャンプ等の行事に参加させて頂いたことが懐かしく思い出されました。活動を通して青年達は思いやりの心、感謝する心等、多くのことを学ばせて頂きました。

初めは介助の仕方も分からず、活動にも力が入ってしまいましたが、次第に力みも抜け、出来ない所を介助することに気付き、活動もスムーズにいくようになりました。

私もつっかいぼうさんとの御縁が無かったら今の私は無かった様に思います。

活動を通して介助の仕方、車椅子の扱い方等自然体で接する大切さを知り、介護の仕事に携わるキッカケになり、今の私があると思っています。

つっかいぼうさんもNPO法人を取得され、活動の輪も広がり、多くの方々との触れ合いを通して、ますます発展されますことを心から祈念し、お祝いの挨拶とさせていただきます。

「なんとなく」のススメ

岐阜聖徳学園大学卒業生

井 口 大 輔

なんとなく選んだ部活。それが「社会福祉サークル」であり、私が「つかいぼう」に微力ながら関わっていくきっかけとなった。

恥ずかしながら、同部の主な活動が介護ボランティアである事を知ったのは入部後暫く経ってからの事。

生まれて初めての介護ボランティア。正直とんでもない事を引き受けてしまったという「後悔」の文字が頭をよぎる事になる。

車で一緒に移動—自分より体重のある方を車の座席に乗せる。多目的トイレがまだそれ程普及していなかった当時のトイレ介助。

何ひとつ上手くいかない。或る時は一緒に転げ、或る時は筋肉痛や腰痛に…。今だから言える事だが、嫌になりかけた事も。

だが少しずつ活動に慣れていくうちに話せる人が増え、つかいぼうに携わる当時の職員の方々や参加者の方々と貴重な時間を共有していく中で、同部の仲間・他大学の介護サークルの友人も少しずつ増えた。今でも付き合いが続く親友もできた。

つかいぼうを通しての活動は、学生生活をかけがえのない充実したものにしてくれた。心から感謝したい。

そして、「なんとなく」をきっかけに気軽に参加—後にどっぷりと浸かってくれるボランティアの学生がまた一人二人と増え、つかいぼうがより一層賑やかになる事を祈念したい。

つかいぼうと私

堀 浩 子

私とつかいぼうとの出会いは今から18年前。学生だった私はボランティアクラブの先輩に連れられ、不安をいっぱい抱えてつかいぼうに足を踏み入れた事を今でもはっきり覚えています。

学生の頃は、つかいぼうでの土日のお泊まりやバザーやキャンプ、かるた大会等沢山の行事を通し、多くを学び、また色々な出会いを経験させていただきました。卒業してからもつながり亭のスタッフとしてお世話になり、つかいぼうとは5年間関わることができました。

地元に戻ることにすっきりご無沙汰していますが、つかいぼうと共に過ごした岐阜での5年間は私にとってなくてはならない大切な時間です。

色々な取り組みをし、新しい作業所もでき、益々のご発展を遠く離れた地よりお祈りしています。

25周年おめでとうございます。

25周年に寄せて

小林 めぐみ

「つかいぼう」25周年、おめでとうございます。

今年もあと3日となった昨年末、見覚えのある字で書かれた封筒が届きました。何かあったのだろうか？そう思いながら開けてみると、「つかいぼう25周年」の文字が…。あれから25年かぁ…と時間の流れの早さを楽しみ感じながら、当時のことを思い出すと、2年間の様々なことが思い出されました。

私がみなさんと過したのは、中短（中部女子短期大学）での2年間。たくさんの方と出会い、一緒に色々な所へ行かせて頂き、多くの経験をさせて頂きました。市内、県内はもちろん、泊まりで県外へ行ったこともありました。コンサートに行ったことも。

当時は、車いすの方が出掛けるには、今よりも社会の環境も人々の目も厳しい時代でした。しかし、みなさんがパワフルに外に出掛ける姿は、一緒にいて誇らしく思えました。

「つかいぼう」が出来た時も、みなさんの自立しようと前に進むパワーに感動しました。あれから25年。今も活動が続いていることを、当時を知る者として嬉しく思います。

多くの方々の努力と協力があったのことと思います。

25年間、ずっと思い続けて来たことがあります。みなさんと出会い、共に過ごした2年間は、私にとっての財産であり、宝であると。今でもあの2年間で私の人生の中で一番充実していたと思っています。

卒業後、関わることは出来なくなってしまいましたが、「つかいぼう」の今後の更なる発展を心よりお祈りしています。

つかいぼうの25周年によせて

社会福祉法人インクルふじ

でら～と所長 小林 不二也

私とつかいぼうとの出会いは当時、国立療養所長良病院に指導員として筋ジス病棟を担当しているときでした。もう12年も前になります。

入所者のさんが、30年以上過ごした病棟での生活から、自立してアパート生活をしたという希望を持って活動することのお手伝いをさせていただきました。彼は、気管切開をして、呼吸器をつけ、寝たきりで動かせるのはわずかな指先の動きと会話だけでした。趣味は囲碁や短歌をパソコンで打って、短歌集を作るほどでした。

しかし、幼い頃からの闘病生活で、自らが生活を組み立てるという経験は無く、彼の思いを実現させるためには、自立して介護者に自分の思いや希望を指示する力が必要でした。当時支援に訪れた吉田理事長と連携して、彼に厳しく在宅生活を組み立てるトレーニングをしたことを今でも印象深く思い出されます。

その後彼はつかいぼうの支援を受け、自分の夢を一步一步実現していきました。そして、その後同病の後輩たちが続々と病棟から巣立って、自分の生活をしています。彼は最重度障害者の自立生活の先駆者だったと思います。吉田理事長も私も様々なハードルがありながらもともに悩み、彼に問いただし、と試行錯誤の連続だったと思います。

今私は国立を退職して、静岡県で在宅重症心身障害児（者）の皆さんの自立を目指して取り組んでいます。私にとって、つかいぼうの存在は原点に近いもので、感謝に耐えられません。制度が不安定な中、まだまだ茨の道ですが、ともにだれもが普通に生きていける社会を目指してがんばっていきましょう。

25周年によせて

松原 江実子

「つかいぼう」25周年おめでとうございます。

初めに岐阜の旧「山鳩の会」・大垣の「太陽の会」の方々と交流し始め、あれから時が流れ、福祉の流れも随分変わってきました。

時代が変わっても人と人とのつながりを大切に、つながりの輪をこれからも大きく長く続けていってほしいと願っています。

25周年によせて

久郷 陽子

設立25周年おめでとうございます。思い起こせば、つかいぼうのつながり亭という小さな作業所に職員として就労したのが御縁でした。あの頃は何もない時代で、障害を持つ当事者と持たない仲間と知恵を出し合って、協力する時代でした。何もない所から事業化し、発展していくときは、「とにかくやろうよ!」と、田嶋さんの声で、「そうだ! やってみよう」とみんなが動き、吉田さんが「尻拭いをする」という、楽しい時代でした。

総合支援法に翻弄される現在、運営は難しいのですが、今も共通して言えることは、地域で暮らす、普通に暮らすことが当たり前を目指して、つかいぼうがある。それが共通の意識だと思います。

拙い文章で申し訳ありませんが、今後も皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

僕とつかいぼう

小川 雅敏

つかいぼう25周年おめでとうございます。

僕にとって、つかいぼうというのはボランティアさんとの出会う場であると思っています。つかいぼうに毎週土曜日泊まったり、つながり亭に働きに行ったり、キャンプ、カルタ取り大会に参加しているうちにボランティアさんが増えていったのがよかったです。このおかげで野球観戦やカラオケに行けたこともうれしかったです。

今はつながり亭はやめていますが、これからも頑張っていきたいと思っています。



25周年に寄せて

大 當 保 子

25周年、おめでとうございます。
つっかいぼうとの出会いは、高校生の時に生まれて初めて親の付き添いなしで参加した“やろまい会キャンプ”でした。はじめはすごく不安でしたが、“なんとかなるものだ”と少し自信を持たれたことが懐かしく思い出されます。これからもどうか支え合えるつっかいぼうでいてください。



キャンプでの大當さん

私とつっかいぼうの出会い

長 屋 絵 美

私と「つっかいぼう」の出会いは、高校卒業後に同級生の母親の紹介から始まりました。当時、とある作業所に通っていて「このままで本当にいいのか」悩んでいました。そんな時、「ヴァリエーション」を紹介してもらいました。

「ヴァリエーション」とは「つっかいぼう」が運営する小規模授産所です。

そこでは、友達は何人も出来、気持ちも楽になり、それまでの気持ちや考え方が変わってきました。

つっかいぼうと出会って大学生とも知り合いになりました。主にボランティアさんとして来てくれていた大学生と友達になりました。その友達になった大学生の友達とも知り合い、どんどん友達の輪が広がっていきました。自分の学生の頃を思い出したようでした。

一人暮らしを始めるようになり、学生さんと関わることも増え、一緒に遊んだり、泊まりに来てくれたり、泊りに行ったり、とても楽しく一人暮らしができました。

カルタ大会やキャンプ、花見などの行事も楽しかったです。

普通に生活が出来、普通に出かけ、普通に会話出来る。それがとても嬉しかったです。

又、仕事だけではなく、当時何もわからなかった私が一人で出かけられるようになり、一人暮らしもできたのは「つっかいぼう」に出会ったおかげです。

友達同士でショッピングに行ったり、食事に行ったり、飲みに行ったり、カラオケに行ったり、「つっかいぼう」に出会う前の私が見たらビックリすると思います。

ヴァリエーションに通うことになり、自分らしさを見つけることが出来ました。

一人暮らし、そして結婚。今はいろいろなことが充実しています。

色々な人と出会い、力と笑顔をもらいながら今の生活を頑張っています。

私とつかいぼう

勝野輝美

25年と言えば四半世紀、とても長いようですが、振り返ってみればついこの間のような気さえます。

障害者の自立を目指し広く社会に訴えかける活動、それは私の生活そのものでもありました。絵に描いた餅ではなく障害者自身が身を以て一つずつ現実の物にして行く、そしてそれが私の青春でもあり、それを支えてくれたのが「つかいぼう」でした。

キャンプは家族以外の健常者と共に生活する時間、かるた大会は障害者の生活を俳句にするなど心情を訴え、当時はまだまだ障害者が主体となることが少なかった中、どれも新鮮で夜中まで一生懸命準備したのを昨日のこのように覚えています。

25年前、それは私が結婚を決めた時でもあります。私のポリシー、それは普通の人が普通になることをあきらめずトライすること。重度の障害があっても社会の一員としての役割を担う、自分のことは自分で決め、そして責任も負う。こんな当たり前のことを当たり前にしているのだと思わせてくれたのも、「つかいぼう」だったかもしれません。

結婚、出産、子育て、日々の生活を私が思う当たり前とはかけ離れた制度を使って生活していくこと自体が戦いで、気が遠くなるような現状を抱えながらも、日々交渉、そして理解を求める歳月、これが「つかいぼう」なのではないかと思います。こんなこといつまで続ければいいのだろう、何もかもやめて施設にでも入って終わりにしたいと思ったことも何度かありました。そんな時一言「やり続ければいつか叶う」という吉田さんの言葉が思い出されます。

当時は考えられなかったことも今は少しずつ叶い、地味ではあるけれども続けることの大切さを感じさせてくれました。

これからも少しは障害者を認められたことを基盤に、休むことなく若い人たちに繋げてステップアップしていければと思います。

つかいぼう25周年に寄せて

愛知県重度障害者の生活をよくする会

会長 平山晶士

つかいぼう25周年を迎えたことに対して、心よりお祝い申し上げます。

僕とつかいぼうとの最初の出会いは、1999年に富山であったDPI全国集会で戸田さんとの出会いでした。当時はAJU自立の家サマリアハウスに入居していて、岐阜に帰って障害者運動をやりたいと考えていた頃です。その約3年後の2002年の春、家だけは岐阜市に引っ越して、つかいぼうの介助派遣を利用しながら、一人暮らしをスタートしました。僕が名古屋でなく岐阜で住みたかったのは、少年時代に岐阜市の施設にいたことと、当時、今井さんの自立のために岐阜市に作らせた自薦式ヘルパー制度に乗っかろうとして来ました。

それから12年が経とうとしているところです。未だに運動及び仕事の拠点は名古屋ですが、介助派遣はずっと使い続けています。毎晩毎晩夜遅く、ヘルパーを派遣して貰い、時々仕事などで遅れるときも快く引き受けて貰い、本当に感謝しています。

また、岐阜の障害当事者運動を引っ張ってこられ、現・長良医療センターから多くの重度の障害のある人たちの自立生活への道を作ったり、支援費制度の2年前に自薦式ヘルパー制度を作らせ、重度の障害のある人たちが岐阜の地で自立生活ができる環境を築いてこられたりするなど、地道な運動に敬意を表します。僕はそんなつかいぼうを常に誇りに思います。

これからもよろしく願いいたします。

編集を終えて

「…これは想像以上にボリュームがあるな」届いたばかりの印刷見本の束を前に、まず最初に思ったのはそれでした。

設立25周年を記念して、これまでの活動のふりかえりとこれからの活動への思い、そしてこれまで活動に関わってくださった皆様からのメッセージを収めた冊子をつくろう、と言ってから数ヶ月。ようやく形になりました。

その人その人の人生があるように、私たちに関わってくださった人の数だけ、その人その人にとってのつかいぼうがあります。そんないろいろなつかいぼうと、そこに関わられた人たちのことを、この冊子を通してシェアできたなら幸いです。

お忙しい中、快く原稿をお寄せくださった皆様はじめ、貴重な写真や資料をご提供いただくなど本誌の発行にご協力いただいた皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

そして、今これをお読みになっているあなた。最後までお読みいただき、ありがとうございました。もしもご縁がありましたなら、いつかまたどこかでお会いしましょう。
(編集担当/後藤)

25周年記念誌の写真などの資料を探し始めたら、当然の事ながら様々なものがあり、どれにも強い思い出があり選ぶのに大変迷いました。

制度的には殆どなにも無い発足当初。確かにあったものは熱い思いでした。家賃をカンパを求めていくのですが、まず障害をもつみんなが基本的な部分は責任をもとうという確認のもと運営が始まりました。本当に厳しい財布の中からはなんとかやり繰りをしていました。しかし、そこには今までに無い充実感があり、ひとり一人が毎週末にはつかいぼうの家に集まり、合宿のような日々でした。

時代が変わり、制度も不十分ながら整い、活動の中心は事業所の運営となってきました。毎日が事業に追われ、ひとり一人が集い朝まで語り合うような状況は遠い昔になってしまいました。

突っかい棒を支えていただいた方々、一緒に活動してきた障害をもつ仲間。現在の法人の運営にたっさわっていただいている方々から貴重な原稿をお寄せいただきました。ほんとうに有難うございます。

この記念誌を編集しながら、当初の思いと感動を振り返りつつ事業と言う中にどう生かしていけるのか等と考えています。

(編集担当/戸田)

つかいぼう設立25周年記念誌 地域で暮らすことを求めて

発行日 2014年3月1日

編集 25周年記念誌編集委員会

製作・印刷 戸田写植

発行 特定非営利活動法人障害者自立センターつかいぼう

〒502-0843 岐阜市早田東町8丁目4番1 パセール長良1F3号

TEL 058-215-7343 FAX 058-9296-5343

